

安念千重子が歌うマーラー「大地の歌」に寄せて

日常において、自分が死ぬということを想像することはあるだろうか。私たちのほとんどは明日も明後日も、来年も数年後も生きていることを前提に毎日を過ごしている。でもいつその人生が終わるのか、明日なのか、何十年後なのか、それは誰にもわからない。

私自身これまで、死は忌み嫌うもの、目を背けたい対象のものであり、真剣に考えたことはなかった。しかし、この「大地の歌」という作品に触れると、自然といずれ訪れる人生の終末に思いを馳せることができるのだ。

この作品はグスタフ・マーラー（1860-1911）の最高傑作のひとつとして知られている。李白、孟浩然、王維などの漢詩をもとにハンス・ベトゲがドイツ語に訳して作られた「中国の笛」という詩集を歌詞とした作品。「生は暗く、死もまた暗い！」と叫ぶ第1曲から、「大地は永遠に」と人生の終焉を歌った第6曲まで、どこか東洋的な諦観を感じ取れる内容である。

マーラーは、当時オーストリアに併合されていたボヘミア生まれのユダヤ人であり、ウィーン、ドイツ、そしてのちにアメリカへ渡り活躍した作曲家である。それまでのドイツロマン派音楽の伝統を廃し、個としての芸術を追求した。彼の有名な言葉に「私には故郷がない。オーストリア人の中ではボヘミア人として、ドイツ人の中ではオーストリア人として、地上のあらゆる人々の間ではユダヤ人として」というものがあるが、マーラーの場合、住んだ土地が排他的だったということではなく、ユダヤ人としてのアイデンティティに複雑な感情が絡んでいたから、と思われる。もともと根底に深い疎外感があるその音楽には、アイロニー（皮肉）が多く含まれてはいるものの、極限まで美しく、聴き手に迎合することなく個性を貫いている。

さて、そんなマーラーにとって歌は表現の核心であり、交響曲に合唱を付けたり、いくつもの秀逸な歌曲を残している。人間の声という手段は何より国や人種を超えて人の心に訴える力を発揮する。特に「大地の歌」は全編がテノールとアルト（またはメゾソプラノ）の二人のソリストが交替で歌い上げる特殊な形式の交響曲であり、宗教を超越した死生観には、聴く者の心を惹き付ける力がある。今回演奏するのは、よくあるオーケストラ版からのピアノ編曲ではなく、作曲家自身によるオリジナルなピアノ版で、より濃密に歌を感じることが出来る。

そんな「大地の歌」をレパートリーとする声楽家が富山にいることを知ったのは、平成23年の夏。富山県オペラ協会会長の安念千重子氏である。現在御年81歳にして、スマートフォンやタブレットを自在に操り、若い人たちの声に好奇心旺盛に耳を傾ける彼女からは、いつもとても朗らかで柔らかな印象を受ける。はじめは、そんなふわりとした声楽家と強烈な個性を放つマーラー音楽があまりに結びつかないので、かえって興味深く感じた。

安念氏は1935年生まれ。幼少期を母親の郷里である砺波で過ごし、その後高校3年で声楽を志し東京芸術大学で学ぶ。半世紀に渡り歌い続けている、日本を代表するメゾソプラノ歌手である。

「うたう」ということは「うったえる」ことから来ていると彼女は言う。常々、音楽とは訴えるものがあるが初めて伝える意味を成す、と思っていたが、彼女の「うったえる」は他人に自分の哀情を「慇（うった）える」ことであり、「聞いてもらいたい」「わかってほしい」というただひたすらなる心情の流露である「訴える」とは異なるものである。うたうことには、「哀訴・愁訴」そして忘れてはならない「鎮魂」の意味があるというのだ。それは、あくまでも作品に対し忠実であり、かつ自身の中に語るものがなければ表現し得ないものなのだ。

「ただ曲に酔っているうちは何も伝わらない。表現者は受け取る側と違う次元にいないなければならない」とも。作品を借りて自由気ままに自分の感情を吐露する演奏では、その作品の本当の声は伝えられない。楽譜に書かれてあることを完全に習得し、忠実であろうとすれば、そこに演奏者の自由はないが、そのうえで聴く人に夢と希望、勇気と安らぎを与えねばならない、ということだ。若い頃からストイックに作品と向き合ってきたからこそ言える、厳しい一面が垣間見える言葉である。

さて、マーラーほど演奏者に対する要求が多い作曲家はいないであろう。多層的な構造に加えて、彼の音楽には比喩的表現が多用されており、忠実に演奏しようとする、意味深な示唆を読み解くことから始めなければならない。

生前のマーラーはウィーンの前衛歌劇場（現在の国立歌劇場）の芸術監督、ウィーン・フィルの指揮者を務めたが、その仕事ぶりは恐怖政治を連想させるものであったらしい。リハーサルは長時間にわたり徹底的に行われ、ミスをした楽団員はいつの間にか消えていかねばならず、歌手たちは美声をひけらかすことを禁じられ、ひたすら完璧を求められたという。他人に厳しいマーラーのやり方は当然反発も激しく、様々な物議を呼んだ。とはいえ、それは独善的であるということではなく、厳しさこそが彼の音楽への敬愛であったのだと、後の世に生きる私たちは知ることが出来る。

そんな彼の作品を忠実に再現するとなると、ただ事では済まない。技術的に演奏者泣かせな表示が至る所にあり、実現不可能に思われる箇所も存在する。当時は理解されにくかったことであろう。

しかし、その音楽の力はこの現代においてこそ発揮されるにふさわしい気がしてならない。実際「私が死んで50年も経てば、やがて私の時代が来る」とマーラー自身、生前口にしてたという。

現在、私たちは膨大な情報を得ることができ、様々な文化を自由に享受することができる。でも本当に自由かと言えばそうではなく、諸々の制約の中で生きている。だからこそいつでも人は自由に憧れる、と安念氏は言う。手に入らないから求めるのだと。作品に対しても、自由にならないからこそ、憧れ続けることが出来るのかもしれない。

彼女の好きな言葉に「みえる命、みえない命」というものがあるという。京都のある住職の言葉らしい。命には二つあり、みえる命は肉体としての人間の命、みえない命は「自由」「平等」「普遍・永遠」なのだろうか。人間は死によって魂が途切れるものではなく、死がすべての終わりではないという、希望と夢につながるのが「みえない命」である。そして芸術はまさにその「みえない命」への憧れの象徴なのだ。

安念氏は数年前に肺がんを患い、肺の四分の一を切除する手術を受けている。声楽家にとっては肝心要の肺活量を大きく失い、普通であれば、これまでのように歌うことが出来ない致命的なものかと捉え、ステージから遠ざかってしまうことであろう。しかし、彼女はその運命を受け入れ、持ち前の柔軟さをもって、現在もなお新たな発声法を研究している。そして「以前よりも楽に歌えるようになったのよ。」と微笑む。まさに「みえない命」を見ているからこそ、であろう。

与えられた状況の中で最善を尽くしながら今を謳歌する。彼女がうたう「大地の歌」からは、死と向き合う悲壮感や不安ではなく、不思議な安らぎと優しい哀情が聞こえてくる。